

幼児における Group Therapy

(集団心理療法)

(愛育研究所) 森脇 要
権平 俊子

我々は幼児の人格の問題を解決する為に直接に幼児の人格に働きかける方法として、集団心理療法を実施した。このグループは治療者一名、治療を受ける幼児四〜八名からなり、禁止をしないで、出来るだけ庄力のない自由な雰囲気を作り、治療者は幼児の中心にならず、背景にしりぞいて、幼児達の能動的な活動や交渉を多くするように努力を払い、幼児の遊ぶ玩具を置いて自由に遊ばせた。治療は週二回、一回の時間は二時間である。治療の方法、経過の検討については、四月に日本心理学会で発表したもので、ここでは省き治療効果のあった一例につき経過の報告をする。

N・K・昭和二十四年三月二十四日生、幼稚園で三月余いても皆の前で話をせず、人になれないで、何もしないと主訴で、幼稚園の先生付添いで母と共に教養相談に二九年七月六日に来所した。その折知能テストは、先生に抱かれて入室したが全く要求に応じないで暴れる。積木や絵本を与えても使おうとはしないで、机の下に投げ捨てたり、先生に噛みついたりする。二〇〜三〇分後菱形を書いた

が非常になげやりな書き方をし、長方形構成の問題も始め一回だけしたが次にわざと違う形を作る。途中先生退室、少し暴れたがすぐに大人しくなるもテストには応じない。一〇分休憩後、絵合せにはすぐ応じたが後はしない。暫く室内を歩き廻って自分勝手な悪戯をするが名前を字で書く。テストは全部出来なかったが、おくれない事は判った。(昭和三〇年三月一日 I.Q. 129) 幼稚園は一年保育で入ったが、どうしても母親から離れず一月後から無理に離して父が幼稚園の門まで送る。母から離れた後は先生に縋りついて離れない。又噛みついたりする、皆の前では何もしない。別室ではよくして、食事も別室でよく食べるが、皆の前では先生が食べさせると口だけあける。家では客があるとはしゃぐ、母をつねる。客には話しかけられても答えない、母が云うには普通の時は別に変化はなく、絶えず他の人に気が散っている。一人で留守もするが、友達には衝動的に振舞うとの事である。父は大学出身の商事会社勤務、三四歳、母は高女出身三〇歳、兄が三カ月で肺炎で死亡、弟二歳六カ月がある。N・K・は母のジフテリア中に二〇日早く生れ、本人も感染して重体になった。混合栄養で離乳二歳、生齒稍遅く、始歩一カ月、始語一〇カ月、扁桃腺炎を一年に二〜三回やるが別に大きな病氣はしない。生後現在まで八回転居している。

九月一七日よりグループに入り治療を始め、引越しの為、幼稚園を退園した。治療中の行動の変化をみると、第八回までは母親から離れないで、積極的に遊ぼうともしない。他の幼児も殆ど相手にしなかった。第九回、幼児二人がN・Kの弟をいじめ、又N・Kに鉄砲をむけた。これを機に母から離れて外にも出る。第一〇回始めて母

N. K. の治療中の行動の変化

治療回数	母親 離れない	から 離れる	ねころぶ 床に坐る	治療者は 生息を許す がりつく	友達の手を 握る	一人遊び	並行遊び	協同遊び	母親の傍で	床に座つて 居る時	椅子に 座つて
1	2										
3	4										
5	6										
7	8										
9	10										
11	12										
13	14										
15	16										
17	18										
19	20										
21	22										
23	24										
25	26										
27	28										

から離れ入室したがそれと同時に寝ころぶ、お八ツも寝ころびながら食べる。第一一回寝転び、お八ツも寝ころんで一人で食べる。第一二回床に座りお八ツも隅で食べる。幼児M・Sの求めに応じて皆が入れないように戸を押えて「面白いな」と云う。始めて協力的行動をする。第一三回相変らず寝ころんでいる。治療者の足をつねったり乱暴をする。お八ツを犬の真似だと云って四ツ這いになって食べる。第一四回友達が外に出るか問うと始めて答える。円テーパーにつきお八ツを食べるが半分は床に坐ってする。治療者にまつわりついているが、S・Kと相撲をしこれを機にままことに加わり、S・Kと追いかけてもする。始めて遊びに加わる。第一五回一人の間ではあるが、始めて描画、自分の画を貶す。床にねころび治療者に乱暴をする。S・Kと話を始める。お八ツ始め床に座りこんでいるが後テーパーで食べる。K・Sと積木遊び、自分の作ったのを見慢する。自ら友達と接するようになる。第一六回治療者に対する乱暴は前回よりひどい。寝ころぶ治療者の注意をひくようなことを云いながら椅子に座ってお八ツを食べる、始めていない子の名前を云う。一人離れて積木、第一七回治療者に乱暴をし、寝ころんでいる。積木の箱を開けるのを治療者に云われて手伝う。お八ツはねころんで後治療者の膝の上で食べる。椅子を頭にのせて背を追いかけて喜ぶ、第一八回寝ころぶ、治療者の膝の上の。お八ツは腰かけて食べる。ひどく自分ではどうすることも出来ない程かけ廻る。第一九回一カ月余休んだが変化はない。寝ころんで治療者に乱暴をし、すがりつき頬づりをする。椅子に坐ってお八ツを食べる。K・Sのひくオルガンを下手だと貶す。協同遊びをしない。第二〇回一

人であるため嫉妬がないのか、治療者にまつわりついたりねころぶことはない。お八ツも落着いて食べる。第二一回友達や治療者の注意をひくような行動をするが注意が向かないとねころぶ、前回ちゃんと食べたお八ツを床にはったり治療者にもたれて食べる。二人のままごとに関心を示すがグループに入れない。第二二回少し部屋を無意味にかけ廻り、ねころぶ、治療者が入室すると来て帰ると云う。お八ツは着席して食べる、進んで遊ぼうとしない。第二三回治療者に乱暴をしたり、治療者の頬をなでたり、自分の頬をあててにっこりしたり胸に手を入れたりする。お八ツは着席して食べる。治療者退室後、始め並行遊びであったが、建設的行動になる。第二四回治療者は原則として入室しない事にする。グループに近づくこととする積極性が認められるが、グループには入りきれない。お八ツは自分で椅子を運んで腰かけて食べる。空箱の押しごっこは友達とじゃけんして順をきめ完全にグループに入る。第二五回グループに入りたいがすぐに入る事が出来ない為か友達の注意をひくような行動をする。少しさそわれて遊びに加わるが完全に入りきれない。お八ツは着席して食べる。少し皮肉やいたずらをするが相手にされない。第二六回Sのリードに従って遊ぶ。第二六回すぐにはグループに入れないが自ら友達に話かける。お八ツは着席して食べる。三人で電車ごっこ楽しそう、稍興奮的、第二七回すぐにグループに加り、一心にK・Sのリードに従う。少し乱暴するが友達にさげられてよす。全くグループに入り電車ごっこ。治療前に知能テストをしたが、大へんよく要求に応じた。第二八回余りグループ遊びに入っていない。友達に求められればそれに応じる。終にM・YとK・Yが

積木の箱に入っている上に積木を入れて喜ぶ。

以上二八回をもって治療を中止した。治療中の異常行動はなくなり、家でも友達とすぐ遊べるようになり、小学校入学時のテストも一人で見つかり受けたという。又小学入学後も特に異常行動はない。治療中の行動から見て、自分に常に愛情をかけてもらいたいという欲求の現れと考えられる、兄の死も後すぐに生れた上に生後病気で重体になった為大切に甘やかされて育った。そこに弟が生まれ、弟は可愛い顔であり、両親は知能も遙かに優れていると思つて居り愛情が弟に向けられた。N・Kは弟に嫉妬を感じ、又愛情不足を感じた。母が友達を選好みした上に転居を八回もしたので友達もなく、弟相手の遊びが主であり、友達に接したい欲求があった。行動だけみると知能が劣っているようであるがIQは129ですぐれている。欲求不満を起している点、即ち彼の欲求する事を受容しなかつた為と考えられる。治療者に抱かれ、乱暴し、絡みつく等の事により、欲求を充したとも考えられる。又後半幼児が少く、グループに入りやすく、他の子供も却つてM・Kを誘い入れ、友達と遊べた事も治療効果が上つたと考えられる。

一 施設幼児の社会性の研究

日本女子大学

児 玉 省

石 井 雅 子

高 橋 昱 子